

静御前像の変遷と語られた女性像

平野 杏奈

今日の女性は、大学へ進学し、仕事に付き、結婚した後も、子供が産まれても仕事を続ける、共働き、家事育児を夫婦で分担することが当たり前の世の中になってきている。だが、この考えは、近年のものであり、時代によって、女性に対する女性観が変化している。

この研究の目的は、歴史上の實在の女性である「静御前」を対象として、様々な歴史書・文学に描かれてきた静御前について、どのような人物像が描かれているか、それらを時代別から見える変化から何がわかるのか明らかにすることで、各作品間における静御前像の相違点を検討し、各時代における静御前像の特徴やその背景について、静の行動や活動に視点を置いて、比較、検討、考察していきたいと考えた。

文献調査の結果、鎌倉期に描かれた静御前は、義経の妾としての誇りを持っている女性であり、困難な状況の中でもめげず夫を慕う女性として、周囲の状況を的確に判断・分析し、行動できる女性としても描かれている。そして、室町期に描かれた静御前は、聡明で的確に周囲を把握でき、どのような事態でも油断せず適格に対処できる女性であるが、自主性は乏しく、現状を打開できるだけの行動力を持っていなかった女性として描かれている。

また、静御前の行動や活動に視点を置いて比較検討、考察をすると、鎌倉期での静御前の人物像は、自主性のある自分自身で思考し行動できる女性であり、堂々とした、独立した人格を持った女性として描かれていると考えられた。また、室町期では、人の様子や周囲の状況など場の空気は読めるが、だれかの指示をまたないと自主的に動けない女性であり、立場をわきまえなければならぬものとしても描かれていると考えられた。

これより、静御前の描かれた人物像は、鎌倉期と室町期で大きく変わってしまっており、時代により女性観が変化しているものと考えられる。特に顕著な変化は、行動することのできる静から、行動できない静へと変貌している点である。これは、鎌倉期における女性を独立した人格をもった一個人として見ていた考え方と、室町期における女性を一個人としてではなく、妻として見ていたという考えの変化が大きく由来しているためと考えられた。

(指導教員 白井 哲哉)